

## 聖講習会の印象

### 準備

本団に於ける年一回の最重要尊重なる聖会たる夏季聖講習会は、未曾有の感銘を残して終りをつげた。参加せざりし同胞におくるために、追憶のままにペンを走らせる。

七月二十日、講演会を了えて、能美島より沖田功君をつれて本部に帰る。本部には左官が来て屋根の瓦を治したり、仏前の丸柱を塗ったりしている。女子は大会の寝具等の心配をしている。印刷部では、大会迄に『聖光』の発送を済ませようと馬力をかけている。私は書齋の人となり、講義のプリント作製にとりかかる。誰も彼も大会への希望に燃えている。真に念仏中心に一団となり、一心一体となつて、涙ぐましい精進をつづけている。

今の如き聖講習会は、昭和六年、鳥取県東郷湖畔において開催したのに始まるのである。この年より本団の運動の全ては一変された。七年は厳島、八年は山口県安下庄町、昨年は本部、而して本年と、第五回に当るのである。参加したことのある同胞たちにとっては待ちに待てる大会である。而して、本団にとっては、この聖会こそ、団運動の根本礎石のおかれる時であり、力の源であり、中堅の養成であり、同胞の俱会一処の機会である。

然るに、昨年は本部創設早々のこととて、一切において不行き届きであり、猶、本部内にも幾多の遺憾な問題があつた。然るに、本年こそは、誠にいよいよ本部に於ける第二回ではあり、本部内も亦、真に皆が念仏中心の一体である。凡そ宗教団体に於て最も必要なことは、皆が小我をすてて大我的一致団結を保つことである。不幸にして二つの指導精神があつたり、感情の経緯があつたりすれば、その運動は決して十分なる結果をもたらすことはできない。本部といえども、長い歲月の間には、時としてこの問題の為に苦しまねばならなかつた。然るに、最近の本部は益々一致団結求道精進への理想に近づき、一同念仏中心の一体一心になつて来たことは、この上なく有難いことである。而して本部のこの空気は今やこの日々の活動の中に溢れている。

沖田功君は、ステージの掛額の製作や、仏殿の内部の具装に働いている。亀谷君、越堂君は、寸暇を惜しんで、東奔西走する。

三十一日、風呂場も気持よく出来上つた。仏殿の内部が全て金になつた。『聖光』の発送もすんだ。売店ができる。藤井さんの御厚意でステージに敷物ができる。本年は炊事も本部ですることにする。鳴井いし、近藤ふじの、佐々木智恵子の三女性も帰り来つて、それぞれ部署についている。釜瀬君も三十日帰団、大会の準備は成つた。

階段の中程には、

「同心一体

男よ入る勿れ。女よ入る勿れ。

善よ来る勿れ。悪よ来る勿れ。

智よ入る勿れ。愚よ入る勿れ。

僧よ来る勿れ。俗よ来る勿れ。

貴よ入る勿れ。賤よ入る勿れ。  
富よ来る勿れ。貧よ来る勿れ。

唯南無阿弥陀仏を志求し、行歩する同胞よ帰りませ！」

と書いてある。これ我が団成立の根本信条ではないか。善悪、賢愚、僧俗、男女、等々の一切の対立差別を超えて、南無阿弥陀仏に乗じて生くべきである。南無阿弥陀仏こそ『涅槃経』のいわゆる「如来の語は一味なること猶し大海水の如し。これを第一諦と名く。」ではないか。第一義諦とは南無阿弥陀仏である。

同胞よ。この第一義諦に乗じて帰り来れよ。第一義諦において座せよ。南無阿弥陀仏を志求して、この聖会に臨め。善に座する勿れ。悪に座する勿れ。然らずして、同心一味の大乘の道場たり得ようか。

講堂には、法然上人の御法語、和歌、その尊重されたる諸経、聖教の要文がはりまわされてある。而して、正面の壁には、『念仏者無碍一道也』(念仏者は無碍の一道なり)の聖人のみ語、一方には聖徳太子の聖訓に答え奉る「以和為貴 篤敬三宝」(和を以て貴しと為し、篤く三宝を敬へ)の大文字が大掛額に光っている。一切の準備は出来上った。同胞よ、何時なりと帰り来れ。

## 第一夜

一番の乗り込みは筒賀校の小田夏枝氏である。やがて午後四時の上り下りの列車の着く時間となる。もうそろそろ着く頃だと高須駅に出でんとすれば、同胞たちはすでに三々五々荷物を持って歩んでいる。

「同胞よ、御苦労でした。」

静かに迎える私の前に来つて、同胞たちの眼には露さえ光っている。一同本部に入る。

やがて七時、夜の聖勤は平素の本部のそのままに行う。その時間約一時間、平素本部に於ては、夕の聖勤は四十分乃至一時間である。朝夕の聖勤こそは実に重ぜらるべきである。一日の生活の基調はここにおかれる。いと賢き智慧ある人には合掌も念仏も不必要であるかも知れない。しかし我等如きの愚悪は、仏教を学ぶと雖も、かえつて福助となり、頭につめ込んで邪見傲慢の種とするであろう。念仏行こそは誠に愚者の行信に外ならぬ。

久遠の真実の前に合掌して、砂をかむが如く、顔をそむけたきが如く、落ち着かざるが如き日は、一日も過してはならない。一日の生活は朝の聖勤の延長であり、夕べの聖勤は一日の生活の帰結でなくてはならない。

日も暮れてなごやかなる夕食は大広間で始められる。食事際中、島根県から岡本法幢氏が来会せられる。明覚寺、武井諦了氏の顔が見えないのは淋しいが、しかし徳泉老僧の来会こそ、誠に希有最勝の御精進である。たつたこの間、六月の長期講習にも出席せられ、今又猛暑をおして『源空上人』を聞かんとて、六十四歳の高齢をおして来られたのである。その内面の事情を聞いて涙せぬ者があるだろうか。

和尚、正覚、狂雲、等々と、卓をかこんで食事をすます。その夜は、或は風呂を使い、或は屋外に涼み、或は久しぶりの会談等、自由の夜は打ちくつろいで更けてゆく。

開講

八月一日朝、これより毎日午前五時半、ラジオ体操、六時、朝食、七時、開講であるが、今朝はみ仏の宮殿が帰ったので、その取り付けに暇を取り、なお今朝来会する同胞を待つて、八時、開講式を挙行する。

一、合掌念仏、三帰文、十二礼、合掌宣言、巻頭言朗誦、主管訓辞、会員総代答辞、聖会の歌と、厳肅莊重の中にもいと温くなつかしき空気が、堂に溢る。聖会の歌の終わる処、いよいよ大会の幕は切つて落された。

本年の講題は、七祖の最終、源空上人である。聖講において正信偈を講じはじめて既に四年、本年を以て終わりを告げるのである。我、源空上人を講ぜんとするに当り、その御著述、『選択本願念仏集』を拝読すること三度、伝は主として『勅修伝』により、ここ半ケ年、法然上人の名は私の頭の中に醗酵されてあつた。いよいよこの一週間の中に、お念仏と共に、はき出されんとするのである。上人よ、来りて照護したまえ、而して我をして誤ることなく上人の念仏生活の一端をも伝えさせたまえ。

「本師源空明仏教」……………

ああ、本師源空こそは、我が親鸞聖人の唯一絶対の本師にてまします。

「智慧光のちからより

本師源空あらはれて

浄土真宗をひらきつつ

選択本願のべたもう。

善導源信すすむとも

本師源空ひろめずば

片州濁世のともがらは

いかでか真宗をさとらまし。」

旧仏教は源空上人にとつて何に値したか。哀れ、その鋭い智慧の前には一切はその存在価値を失つた。その時代に於ける一代の碩学も、上人の前には何等の価値を持たなかつた。上人こそは真に直ちに「生死出離の道」を求め給うたのであつた。終に日本に求めて得ず、遙かに唐土の善導大師のみ教によつて、直ちに群生の正定業を念仏一行の上に発見し給うたのであつた。これもとより法然房一人の解脱ではあつたが、これしかしながら、片州濁世のともがらの救われる真宗の開拓であつた。しかのみならず、眩劫多生の間にも出離の強縁を知らざる愚禿の救われる唯一絶対の教主本師の出現であつた。

されば

「眩劫多生のあひだにも

出離の強縁しらざりき  
本師源空いまさずば  
このたびむなしくすぎなまし。

諸仏方便ときいたり  
源空ひじりとしめしつづ  
無上の信心をしへてぞ  
涅槃のかどをばひらきける。

真の知識にあふことは  
かたきが中になほかたし  
流転輪廻のきはなきは  
疑情のさはりにしくぞなき。』

我等は今、我が聖人の絶対帰依し給いし法然房源空上人の御教化を、我が聖人を通して受けんとするものである。  
かくて午前十時まで、上人の伝記を語る。

十時過ぎより、班を四班となし、第一班、梶原慶澤、脇本狂雲。第二班、岡本法幢、藤井範治。第三班、正覚法印柳田西信、吉村好勝。第四班、釜瀬春芳、桂義圓を班長とする各班座談がはじまり、第一班に至る。第一班座談中、山口県宇部市より、田辺実雄民夫妻、藤野哲行君来会、よくも来られたものよ。藤野哲行君は龍大出、教念寺勤務のものしき青年僧である。昨年宇部市に行き、その御尊父及び教念寺院主に願ひ、子として貰いしもの、然るに呼べど招けど、この度まで来会せず。田辺先生のお骨折りでつれ出されたとは、後になつて明らかになつた。後に至り、同君告白して言わく「誰にも何にも頭を下げたことのない私も、とうとうこの度は参つてしまいました。ほんとうに先生の子になります。」哲行君も第一班に編入する。  
かくて第一日の午前をおわる。

#### 合同座談

午後二時、開講。

法然上人の一代はこれを三期にすることが出来る。第一期は御出生より九歳まで、第二期は九歳より四十二歳まで、聖道研究時代。第三期は四十二歳より八十歳まで、浄土門時代である。もしその伝記を詳説せんか、そのみにて日は暮れてしまふであらう。

我等は今、襟を正してこの上人の御一生に聞かねばならぬ。凡そ古今の聖者の通途として、上人も亦その鋭き魂の声を誤魔化さず、一身をあげて求道精進し、地位に非ず、名誉に非ず、学者に非ず、ましてや人間の煩惱の享樂に非ず、唯一心に救われんとして永遠の大道を求められたのであつた。法然上人にもあれ、親鸞聖人にもあれ、

そこには悲痛な内部生命の願いがあつた。不滅の炎が燃え上つていた。この不滅の内的生命の願求のない処に、どうして浄土門の教えが領解出来よう。この全我的な志願こそは、人を内に育てて、遂に大無量寿経、如来本願の宗教を会得せしむるのである。

上人の浄土真宗は四十二歳にして御身御自身の上に開かれたのであつた。黒谷法恩蔵における念仏の第一声こそは、真に日本における浄土宗立教開宗の絶対的の第一声であつたのである。誠にこの立教開宗の第一声こそは、一切群生に先だつて、上人自らの全てが如来によつて救われきり給ひし第一声であつたと共に、群生の上に名告りかけたまいし、如来の第一声であつたのである。

ああ、四十二歳、上人の聡明多智、高德博学を以て、なお四十二歳までも独立の名告りを挙げ給わず、自らの救われきる大行の与えられるまで、衷心の声を誤魔化し給わず、懸命の求法に四十二年を費やし給うたのであつた。

然るに何すれぞ我等の黄嘴青二才にして、僅かなるパンフレットの知識を以て仏法を言々し、今日の身口意の三業は極悪邪悪濁悪愚鈍にしてそれを知らず、年若くしてすでに老大成し、完成して、若老徒らに路傍に道草して、更に毒害を世に流す。我等今日、上人にふれて、その天真正直の御一生の前に合掌してその教えに聞かなくてはならない。

午後四時、講をおわり、直ちに合同座談に移る。

聖講における合同座談こそは、実に同胞たちが、衷心の煩悶、疑問を打ち出し、懸命に解決せんとする聖講中の重大事である。第一日よりすでに真剣なる同胞によつて問題は提出され、解決は求められはじめぬ。

ああ、この真剣なる空気。酷暑は我等を包み、全身これ汗なれども、全会員、暑さをも忘れて猛精進は続けられる。

第一日の昼は終わり、夜は公開講演に移り、先ず会員の意見発表にはじまり、脇本、和尚語り、私は「諸仏方便ときいたり、源空ひじりと示しつつ」の和讃について語る。かくて第一日終りを告げぬ。

### 新らしき顔

本年は昨年よりも盛会である。本部の内部も整頓し、おちつきを得たと共に、同胞も亦聖講の真価を知つて帰り来る者多くなり、かつ段々と不純分子を追い、真剣なる人を以て埋められて来たようである。

本年の新顔にして特に注目せられたるは、徳山の藤井範治君、宇部の藤野哲行君、右田の田村邦夫君、大野の山田峯次君、和木の東岡五郎君等であろう、藤井氏は現に徳山の支部長であり、かの須々万の善徳寺、桂教信氏の教えを受け、須々万の念仏の元祖である。氏感嘆して聖講を評して曰く

「いいとは聞いていましたが、これほどのことであろうとは思いません。」と。よく人に念仏せしむる人であると共に、求道不退の人である。徳山は今秋より市制を敷く、支部又大いに発展するであろう。藤野君につきては先に語つた。光明団魂に無条件に一味となられたことこそ嬉しきことである。山口県右田支部に青年田村邦夫

君あり、右田において見出したる唯一の青年である。約に違わず出席してくれたことは嬉しい極みであった。同君の上に何が与えられたか、それは唯仏天のみ知り給うことではあるが、大会における忘れ難き一人である。

大野村は今もまた村の紛擾絶えず、物質に富んで精神的には荒れきった処である。小田峯次氏はその小学校に奉職中である。同氏の胸に何ものか生れたであろうことを信ずる。和木の東岡君は水害の為に出席し得なかつた同志を代表して出席、一兩日途中で家業の為に帰り、再び来会された程の熱意、和木光明団の将来、実に待つべきあるを信ずる。

能美島より十一名の出席者あり、内、大磯力太郎氏は能美工場の中堅社員、休日を利用して出席して下され、北本鉄蔵氏は呉海軍工廠を休んで全出席、その真剣なる求道は、やがて大柿に南無金剛の杭を一本出現するであろう。

近頃、仏道に懸命の精進を続けている檜部區市氏、郵便局の休暇をとつて出席した小野武経、徳山は誠にものすごい勢いである。

豊田郡の天野博三、部谷啓一、両君の出席はやがて河内支部の強化であり、末田登氏の全出席は光明団発生地の根本的再建への初一步であろう。

その他多くの注目すべき人があるが省略する。こうした人たちに古参の粒選りを加えて、登録総員九十六名、それに参観者を加えて百名以上の聖会である。しかし私は、参会せんとして参会しえざる事情のもとにある多くの同胞を憶う。

「合掌、先生、我等が久しく待望していました聖講習会は開かれました。この炎天下に同じみ名に生きる全国の同志の真剣な求道のみ姿、尊い講習会の有様を憶い浮べ6ています。本年は必ず聖会に参加して懐しい同胞と一体に生きたいと願いながら、遂に参加出来ざることを残念に思います。何卒不参加お許し下さいませ。真に我等にとつてはこの聖会こそは、鉄火の洗礼によつて根本信念を体得し、血盟の士として全国的に進軍すべき重大なる聖日であります。

先生には連日御進講下さいまして真に有り難うございます。さぞさぞ御疲労のこととお察し申します。先生、たとえ参加出来ませずとも、この聖日一週間は福山の天地より列席の同志と一体にて、心は遠く聖会に相見え、御教示下さる先生の無声の声を聞いています。講習会もいよいよ三日四日と白熱の度を加えてまいります。先生には御尊体、御大事にして下さい……………」

#### 選択集

『選択本願念仏集』こそは法然上人の立教開宗の根本聖典である。これ月輪禪定九条兼実公の懇請によつてもなされたものである。

本願念仏こそは一切衆生に廻向せられたる唯一絶対の正定業である。本集又それを光闡せんとするのである。『選択本願念仏』こそ法然上人の生命である。然れば『本願念仏』を選択し給うは一体誰であるのか。本集十六章中、第三章以下は殆んどこの問題に対する解答に外ならない。上人はこの問題に対して、いわゆる八種選択を以て答えられた。

選択本願念仏は、その根本をさぐれば弥陀五劫思惟の選択である。誠に名号成就こそは、如来の自利成仏の全てであると共に、一切衆生を利他成就して往生成仏せしむる全てである。第三、本願章こそは真にこの選択本願を示されたものである。更に觀經において、弥陀は念仏の行者を選択摂取し給う等、四種の弥陀選択を挙げ、次いで釈迦選択を挙げて三種を説き、やがて十方諸仏の選択証誠を説き、三仏八種の選択を示して、諸仏同心の選択念仏を説かんとせられるのである。而して上人は、この三仏選択念仏を無量寿經、觀無量寿經、阿彌陀經及び般舟三昧經の上に発見せられた。私は本講習の主題を、この八種選択の詳説においた。

更に遡つて第一章、立教章には、道綽禪師の文を出して、いわゆる聖道浄土の二門を挙げ、禪師にあつては釈迦一代の教説を分類する教判であつた聖道浄土の二文の説を徹底せしめて、これを具体的な宗判となし、華嚴、天台、真言、禪、俱舍、法相、唯識、三論、律等の八家九宗を聖道門となし、浄土宗を寓宗的立場より救つて独立の宗教たらしめられたのであつた。

而して、第二、二行章においては、行を雑行と正行とに分類し、正行を助業と正定業とに分ち、ついに念仏行を唯一絶対の正定業となし給う善導の真意を發揮せられたのであつた。かくて、かの総結の文における、

「夫れ速に生死を離れんと欲すれば、二種の勝法の中、且く聖道門を闔きて選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲すれば、正雑二行中、且く諸の雑行を抛ちて選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲すれば、正助二業の中、猶助業を傍らにして選んで正定を専らにすべし。正定之業とは即ち是れ仏名を称するなり。称名すれば必ず生ずることを得、仏の本願に依るが故に。」

この一文こそ、捨閣抛傍らによつて念仏行を樹てると共に、何時しか、旧教権、旧仏教の一切を根本よりくつがえしたる無効の宣言書ではないか。しかも、それはあくまで聖人の内的体験の声としてなされたのである。我等は今、日を追うに従つて、上人の念仏の世界の真風光へと触れて行つた。

### 悩む人々

日を追つて、各班座談、合同座談には問題が多くなつた。普通の世界では知つたほど明るくなり、聞いたほど明るくなるかも知れない。しかし宗教の世界に於ては、唯漫然と生きていたるもの、如来を殺し、自己を偽つて煩惱無明の曠野に流転せるものは、必ず一念帰命の全的否定の世界へと押しやられて、狭りゆく穴へでも入るが如く暗くなつてゆくであろう。よくその苦痛と煩悶に堪えて聞法するもののみ「廻心ということただひとたびあるべし。」一切の自力を離れて、三定死の行詰りを打開して、洋々たる大心海に一步をふみ出すのである。

本年の座談の中心は、戸河内の備後幾夫、徳山の藤井秀子、山陰の前原信子、戸野の天野博三、徳山の中村ため等の諸氏であつた。

その他にも、井上みつよ、小田一子、佐竹ちえ、沖田常一等の諸氏もよく矢面に立つて精進せられた。

ああ、かくて日一日とこの炎熱にも屈せず、同志の求道精進はその熱を増した。この真剣な空気、この静かにして和氣に満ちた雰囲気、休みの時さえ熱心なる座談の聲が聞える。大衆の前に出て、叱咤され、詰問されることを恥と思うこと勿れ。これ誠に大衆のための善知識ではないか。これまでの生活の無自覚、不徹底、不真面目等々に打ちあたりて、頭をみ仏の前に下げて念仏道の尊さを讃嘆する者、日に日に増す。

### 追弔会

「もう六日たったのか。後一日だ」。

然り、我等の講習に限つて一週間は夢の間に立つた。心からなる同胞の集いである。義務で集つた講習でなく、男子ですら本部の玄関に迎えれば涙が光っている。

「団独特の空気」と人は言う。

我等は、第六日の夜、今は亡き過去の団員の追弔会を開いた。法中、諸師によつて聖勤せられる誦経の声ももの悲しく、ここ十七年が間、お浄土に送つた同胞の顔は次々と眼底に現われる。私は謹んで奉白の文を奉る。

『み仏よ。法界の法王にてまします至尊よ。そして至尊の華光より生れ給いし十方恒沙の諸仏如来よ。無量の菩薩聖衆よ。我等は今、三仏賢聖の尊前にこの聖筵を敷いて、我が光明団々員中、お浄土に召された同胞たち追弔の聖会を開かせて頂きます。

我が光明団は創設ここに十七年、雨風荒き此の間にも、幸いに大悲金剛の撰護によつて、今日ここに至尊のみ前に合掌念仏の一道に生きさせて頂いていることは、至幸至福、海山の鴻恩でございます。これもとより大悲本願力の然らしむる所ではありますが、又同時に、因縁によつて結ばれた同胞たちの献身的精進の賜物であります。団の今日あるはどうして愚悪不徳の我が身の致す処でありましょう。今日この聖講習会を開くに当つても感慨深いものがあります。

諸行無常、会者定離、多くの人に会い、多くの人に別れて参りましたが、わけても共に同一念仏の道に生きさせて頂いた同胞が、ぽつり／＼と地上から帰えて、お浄土に召されてゆきましたこと、静かに去りにし過去を追憶致します時、至尊の浄土に召されたのであるが故に喜ばねばならぬことであるにかかわらず、私の魂は次第に大地の寂しさを知らねばならなくなります。

『おい先生！ あんたが行けば、行く処で竹槍がむくぞ、氣をつけて行けよ。ああ、これほど別れに悲しい思いをさせる位なら、その谷に落ちて死んでしまえ。』と言つた小河内の北治爺も、墓場で骨を焼いておいて、お浄土へゆきました。団の発生地飯室でも、あの念仏そのものであつた吉政の爺も、河野一郎次さんも、地上から消え、和尚の片腕だつた一郎も、筒賀支部を生んだ栗栖はるの姉も神戸で変死、共和支部が生れた時、『支団悉成拳孤声、大法宣布非樂事……』と吟じた刀弥翁も、能美島の礎、石川藤君も、金田支部の市野原弥太郎も、皆至尊の浄土に生れてゆきました。たつたこの間は福山の準ちゃんを、そして島根の片山きく様を失つてまだ三七ヶ日をすぎたばかりであります。その外、教えきれぬほどの同胞の顔が思い出せます。私は



今彼岸と此岸との境に立つて、至尊の不可思議の御徳を讃えます。往還無碍の願力をはつきりと讃仰せずにはいられません。

久遠の浄土にあつて大般涅槃を覚証し、み仏となり給う同胞よ。我等は今、その尊きみ光の前に合掌して、み名によつて、諸法姉妹を憶念し讃嘆致します。あなた方は大地にある限り、み名によつて我等を助け導いて下さいました。そして今、我等の上に還相して限りなく導いて下さることを感謝致します。

我等は諸法姉妹を憶う時、自ら我等がどう生きねばならぬかがはつきりして来ます。私どもは如何に苦悩が押し寄せても、如何に不幸に埋れても、念仏一道を歩みきらして頂きます。私どもは、諸法姉妹に学びなさい、如来浄土の眷族として、あなた方の如く、お浄土まで歩ませて頂きます。

ここに同胞と共に諸法姉妹の尊い足跡を拝し、そのみ徳を讃え、我等衷心の願いを披歴し、いよいよ護念証誠の我等の上にあらんことを謹みくゝて申し上げます。希くば同胞よ、哀愍し摂受し給え。」と。

追弔の歌も物悲しく、すゝり泣きの声すら聞えている。

式後、会員中、教育関係者は別室において光明団教育部会を開催する。一般会員は自由座談会。

### 以信為能入

「当に知るべし。生死の家には疑を以つて所止と為し、涅槃の城には信を以つて能入と為す。」(『選択本願念仏集』 第八 三心章)

もし法然上人を以つて信心を忘れたる念仏の行者の如く、親鸞聖人を以つて念仏を失える信心の主張者の如く考えるならば、それは大いなる誤りである。第八、三心章こそは、觀經の至誠心、深心、廻向発願心の三心によつて、念仏を会得し給える善導の解釈によつて、上人自らの自証を告白し、信心を表詮せられたるものである。而して上人はこの三心章の帰結において遂に、

「生死の家には疑を以つて所止と為し、涅槃之城には信を以つて能入と為す。」

と決し給うたのである。これ念仏の信心に生き給うた上人の重要な信疑決判の文である。これ我が聖人をして遂に、

「生死輪転の家に戻来することは、決するに疑情を以つて所止と為し、速に寂靜無為の樂に入ることは、必ず信心を以て能入と為す。」

と決定せしめ、念仏行そのままに、金剛不壞の他力の大信心を領解せしめたのであつた。

見よ、上人の『選択集』には、その巻頭すでに

### 往生之業

### 南無阿弥陀仏

### 念仏為本

と動かすべからざる標拳がある。これ上人の金剛不壞の信念そのままの表現ではないか。

行を雜行と正行とに分別し、正行を助業と正定業とに簡別して、

「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざるをば、是を正定の業と名く、彼の仏願に順ずるが故に。」

との善導の教旨そのままに合掌念仏せられる処には、動かすべからざる選択の眼が光っている。信とは仏智そのままに開ける心眼である。行の上に投げられる鋭い価値判断である。

誠に遙かなる旅路に流転して久遠の本性を失い、真実より虚偽に、光より暗に、涅槃より生死に、大業より苦に、仏を背にして逃げゆく流転の子は、唯疑情故に生死の巷にあるのである。

他郷を他郷とも知らぬ流転の子は、遙かなる旅路に果てしなく苦悩しつつも、久遠の故郷を知らぬものである。大悲のみ手は浄土より生死の苦海にさしのべられる。如来大悲の本願とは、光より暗に、涅槃より生死にわけ入って、無限に衆生をその魔郷にさまして、生死より浄土に、迷より悟に往生せしめんとする仏心そのものの人生における具体的な力ではないか。この本願力によって、無根の大信は衆生の内に成就せられ、衆生をして、生死そのままに如来浄土の内的眷族たらしめ、正定聚不退の菩薩たらしめる。不退に浄土へと往相せしめられるのである。

されば「生死輪転の家に還来することは、決するに疑情を以つて所止と為し、速に涅槃の樂に入ることは、信心を以つて能入と為す。」との信疑決判の聖訓の上には、大聖人のやるせなき大悲が光っている。生死流転の旅の子の上に無限の涙が流されてある。ああ、誰か他郷に輪転せる我を自証しないで、「いざいなん魔郷にはとゞまるべからず。」との願を発し得よう。本願大悲の召喚の声が心の奥底に徹しよう。久遠の大悲は静かに、生死の巷に「無有出離之縁」と迷えるを、思い知らせ給うであろう。我等はこの文の上上人の上に光る如来大悲の深重を感得するものである。

第七日、最終の講義はこの聖誠によつて閉じられた。

### さらばよ同胞

かくて最後の合同座談もすみ、直ちに閉講式にと移った。仏前聖勤も物悲しく、式辞謝辞も涙にうるみ、同胞の胸より胸に流るる一すじの血潮は、別れの歌と共に悲壮なる誓願を胸に刻みつける。我等はそれぞれ別れて旅に出る。しかしそこには念仏道によつて果さなければならぬ使命が待っている。

同胞よ、健在なれ。我等は長い一週間にわたつて、早朝から深夜まで、唯念仏道の為に精進した。そのことのために尊い聖日を恵まれた。法然上人の世界を親鸞聖人を通して学んだ。

思へ、同胞よ。如来のみ名によつて結ばれたる不可思議なる因縁を、尊き宿縁を。我等は全我を挙げて念仏しつつ忍終不悔の大道を行歩すべく、必然の大道に出されたのではないか。ただ口舌の仏法に非ず、身を以て、濁乱の社会に進んで、念仏道を各々の世界に展開すべき使命を荷負されているのであった。一週間にわたつて受けたる深い感銘は終生にわたつて忘れ得ないであろう。必ずや一生に於ける高き記念塔として、その行手を照らすであろう。我が前に来たつて別れを告げ、その自証を告

白し、過去を懺悔し、身の喜びを告げる同胞たちの一人々々の上に合掌を捧げずには  
いられない。

さらば、友よ、健在なれ。この聖なる広大会を憶念して、如何に苦悩の巷であろう  
とも、力強く出で発ち給え。

念仏に乗托する限り、恒沙諸仏の證誠護念は我等の上にあるであろう。